

安全行動における職業的自尊心の役割(2)

計画行動理論を用いた職業的自尊心-安全行動意思モデル

○大谷 華

芳賀 繁

(立教大学現代心理学部)

The role of occupational pride on safety actions (2):

Constructing a model of safety intention with the theory of planned behavior

Hana Oya

Shigeru Haga

(Rikkyo University)

産業従事者は、ある期間内に一定基準あるいはそれ以上の量と質の業務成果を示すとともに、規則を遵守し安全に作業を遂行することが求められている。産業現場の厳しい時間圧・成果達成と規則遵守・安全行動遂行の二つの要求は必ずしも同じ方向性を持っておらず、作業員個人の中で葛藤が生じることが考えられる。

実際に、多くの作業員が生産にかかわる業務推進行動と安全行動をともに行っているが、彼らはどのように自分を動機づけているのだろうか。「安全行動は実施したからといって、目に見えて成果があがるものではなく、「学習のメカニズムに従うと正の強化因子がない状態で行動を持続しなければならず、動機づけの低下は避けることができない」(臼井, 2007)。放っておけば動機づけが低下するなかで、作業員にあえて自発的に安全行動をとらせ続させる要因があるのだろうか。

不安全行動と並んで、違反的行為は産業組織

にとって問題事象である。岡本・今野(2006)は、組織的違反に抑制的に働く要因として職業的自尊心の1次元である職務的自尊心をあげている。職業的自尊心が不正に対峙する機能を持っているならば、積極的な安全行動を導く要因としても機能しているだろうか。

そこで本研究では、作業員の安全行動を促す安全モチベーションとして職業的自尊心が機能している可能性をさぐり、そのプロセスをモデル化することを目的とする。

大谷・内藤・芳賀(2011)は、安全行動の要因モデルを設定した(図1)。その主たるプロセスは、職業的自尊心が安全を優先事項とする安全態度に寄与し、安全態度が安全行動を導くというものであった。さらに、計画行動理論(Ajzen, 1991)を援用し、安全行動の前段として安全行動意思を設定し、安全態度とともに安全行動に関する主観的規範、安全行動の知覚された制御可能性が安全行動意思の形成を促すとした。また、職業的自尊心は業務を高いあるいは期待される水準で遂行しようという業務意欲と関連しているであろうことから、安全にかかわる要因として業務意欲を加えた。業務意欲は安全態度に何らかの影響を与えていると考えられるが、その関係性は不明であった。

大谷他(2011)が要因モデルに従って製造業の作業員に質問紙調査を行ったところ、3要因で複数の因子が抽出された。安全態度は個人行動型態度とシステム型態度、業務意欲はスピード重視と効率品質重視、そして安全行動の知覚された制御可能性は環境的阻害と主体的行動を含んでいた。これらの因子を包含した職業的



図1 安全行動の要因モデル

自尊心 - 安全行動意思モデルが検証された。

業務意欲から安全態度への影響は一意なものではなく、効率品質重視の業務意欲が個人行動型安全態度を引き上げる一方で、スピード重視の業務意欲はシステム型安全態度を引き上げるが個人行動型安全態度は引き下げるといふ知見が得られた。

本研究では、業務意欲に関する質問項目を拡充してその性質と影響を検討し、またより妥当なモデルの作成を試みる。

調査

2011年11月、2012年1月に、製造業2社の工場の係長、班長、一般社員に質問紙調査を実施した。有効回答数1329（回答率100%、上長465名、一般社員814名、その他・不明50名）、回答者の平均年齢39.2歳（SD=12.1、17歳～64歳）、女性は一般社員33名であった。

質問項目は、職業的自尊心（13項目）、業務意欲（21項目）、安全態度（19項目）、安全行動に対する主観的規範（6項目）、安全行動の知覚された制御可能性（8項目）、安全行動意思（9項目）、デモグラフィック項目であった。

業務意欲についての質問項目は、大谷他（2011）で用いた効率・品質・スピードに関する7項目（「常にどうすれば効率がよいかを考えている」、「何よりも作業スピードが重要だと思う」など）に、2011年に実施した面接調査にもとづいて14項目を加えた21項目であった。

結果

（1）尺度項目

要因ごとに因子分析を行い、因子負荷量0.33以上の項目を選定し、因子ごとの尺度を作成した（ $\alpha=0.51\sim0.88$ ）。なお、本研究の因子分析では、主因子法により因子抽出し、プロマックス回転を行った。

項目を拡充した業務意欲では2因子が抽出された。一つの因子は、業務成果および作業者の個人的達成感や満足感にかかわる内容であったため、因子名を「技量工夫」（12項目、 $\alpha=0.86$ 、質問項目例：「新しい仕事を生み出した

時の喜びは何物にも代えがたい」、「仕事のスキルを磨くことこそ自分の財産になる」、など）とした。もう一つの因子は、工程を遅らせないことを重視し、そのためにはある程度の手順や過程の軽視を含むことがうかがわれたため、因子名を「工程厳守」（7項目、 $\alpha=0.66$ 、「少々定められた手順を飛ばしても、遅れずに仕事の担当を次に引き継ぐことが大切だ」、「かなりの問題が生じていても、ライン（仕事の流れ）を止めることだけは避ける」、など）とした。因子間相関は $r=-0.05$ であった。

安全態度については、大谷他（2011）と同じ19の質問項目を用いたが、因子分析で共通性の低い項目を除いたところ、2因子が抽出された。各因子に含まれる質問項目の内容から、因子名を「安全準備」（6項目、 $\alpha=0.74$ 、「皆が安全規則を守っていないのに自分だけ守るのは馬鹿らしいと思う（逆転項目）」、「ルールを守らなくても事故はそれほど頻繁におこるものではないと思う（逆転項目）」、など）、「事故楽観視」（5項目、 $\alpha=0.51$ 、「安全規則や作業の基本を守れば、事故は防止できると思う」、「自分のやり方ならば絶対に事故は起こらないと思う」、など）とした。因子間相関は $r=0.23$ であった。

他の要因の尺度は大谷他（2011）と同様であった。

（2）工程厳守、事故楽観視の下位因子

信頼性が低かった業務意欲の工程厳守因子と安全態度の事故楽観視因子について、さらに因子分析を行い、下位因子を抽出した。工程厳守因子では、ルール軽視（4項目）と時間重視（3項目）の2下位因子が見出された。事故楽観視因子では、システム信頼（3項目）と自己過信（2項目）の2下位因子が見出された。

これらの因子を加えて、職業的自尊心、業務意欲、安全態度間の関係性を共分散構造分析により検討した（ $cfi=0.81$ 、 $rmsea=0.06$ 、図2）。ルール軽視因子から自己過信にポジティブな、システム信頼にネガティブな影響がみられた。時間重視因子から自己過信には有意な影響は

なく、システム信頼にはポジティブな影響がみられた。ルール軽視因子と時間重視因子の誤差項間の相関 ($r=0.42$)、自己過信因子-システム信頼因子の誤差項間の相関 ($r=0.59$) が見られた。

工程厳守意欲、事故楽観視態度にそれぞれ含まれる下位因子は性質の異なるものであったが、看過しがたい相関関係がみられた。作業者の安全行動への総体的影響を考慮するならば、各下位因子を別個に扱うよりも、想定されていた要因をそれぞれ一つの尺度として扱い、高得点者の場合に下位尺度得点を精査する方が妥当と考えられた。

よって、以下の分析では、工程厳守意欲、事故楽観視態度を安全行動の関連する要因として用いた。

(3) 職業的自尊心 - 安全行動意思モデル

職業的自尊心 - 安全行動意思モデルにあてはめて共分散構造分析を行った (図3, $cfi=0.85$, $rmsea=0.06$)。分析には各尺度項目から因子負荷の高い3項目を使用した。技量工夫意欲については、上位3項目が達成感に関わるも

のに偏っていたため、品質効率にかかわる3項目を加えて6項目とした。

職業的自尊心は安全態度を介して安全行動意思にポジティブな影響を与えていた。職業的自尊心から安全準備態度に対して、安全準備態度から安全行動意思に対してポジティブな影響がみられた。職業的自尊心から技量工夫意欲に対して、技量工夫意欲から安全準備態度に対してポジティブな影響が見られた。一方、職業的自尊心から工程厳守意欲に対して、また工程厳守意欲から安全準備態度に対してネガティブな影響を与えていた。

安全行動意思への影響は、主観的規範からの影響は有意だが限定的であり、知覚された行動制御可能性の主体的行動が非常に強い影響を与えていた。安全行動をとる上での環境的阻害因子は直接、安全行動意思を制御するものではないが、行動制御可能性の主体的行動因子と相関がみられた ($r=0.45$)。

考察

職業的自尊心から安全行動意思への主要なプロセスとして、職業的自尊心が、作業者自身

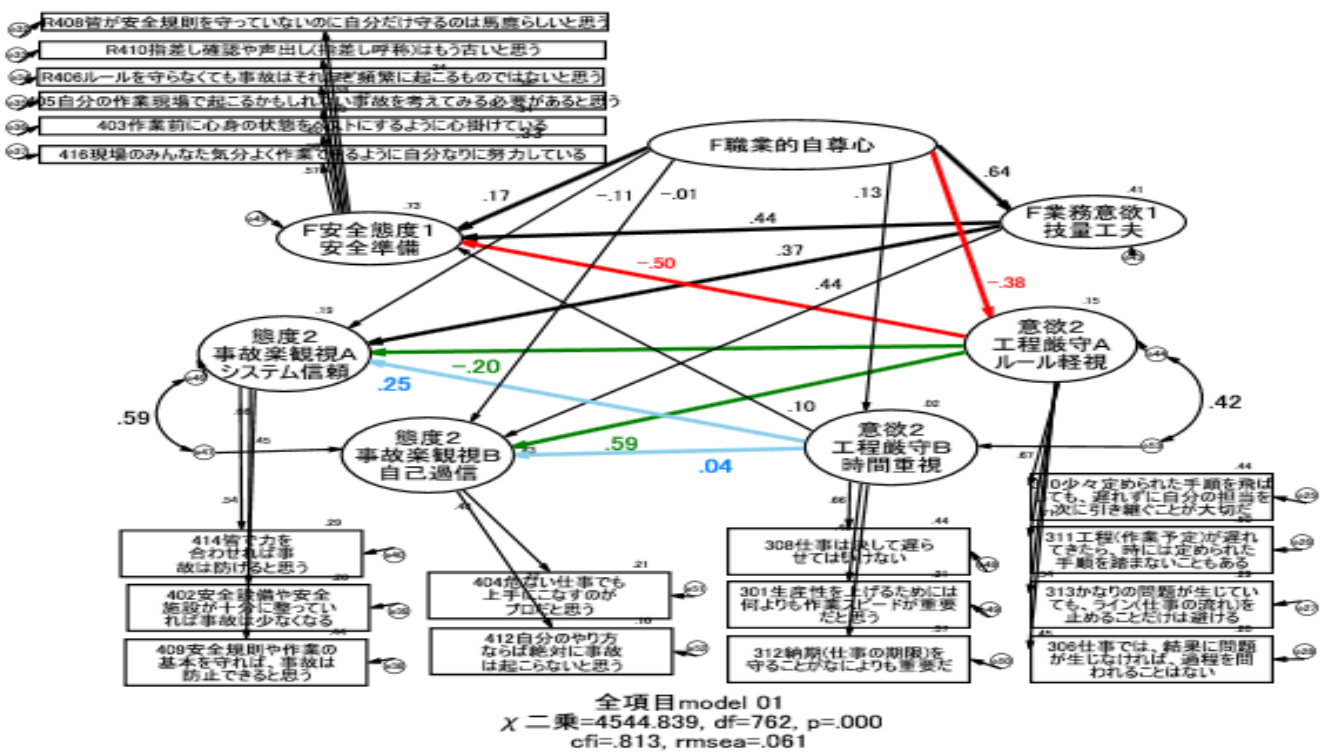


図2 工程厳守意欲から事故楽観視態度への影響 (標準化解)

が事故に備えて行動しようという安全準備態度を介して、安全行動をとる意思を高めていることが確認された。

第1に、職業的自尊心が直接、安全準備態度を高めていた。第2に、職業的自尊心は、業務において技量工夫を目指すモチベーションを高めていた。仕事の技量を高め工夫をする作業者は、安全準備態度を持つ傾向があった。第3に、職業に誇りを持っている作業者は、工程を厳守しようというモチベーションを持ちにくい。工程を厳守しようとする、安全準備態度が低下する傾向がみられた。

技量工夫意欲は、安全準備態度とともに、「～をしていれば、事故は防げる」という事故楽観視態度を導く傾向が見られた。事故楽観視態度は安全行動に反するものではなく、基本的には安全行動意思に正の影響を与えるようである。

しかし、作業群により事故楽観視態度が安全行動意思に影響を与えない場合もあった。

工程厳守意欲には、納期を守り作業スピードを維持するという生産現場の基本的要件と、そのためには手順や過程を軽視するというリスクな態度が含まれている。これら2種類の質問項目の回答は結びつきが強い。工程厳守得点が高いことは潜在的に安全に反する可能性がある一方で、組織の一員としてある程度は維持せざるを得ない性質を持っている。工程厳守意欲をどう位置づけるかが、安全な組織文化のカギとなるのではないだろうか。

【おもな引用文献】

Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 179-211.
 大谷華・内藤岳・芳賀繁(2011). 安全行動における職業的自尊心の役割 日本心理学会第75回大会発表論集, 1220.

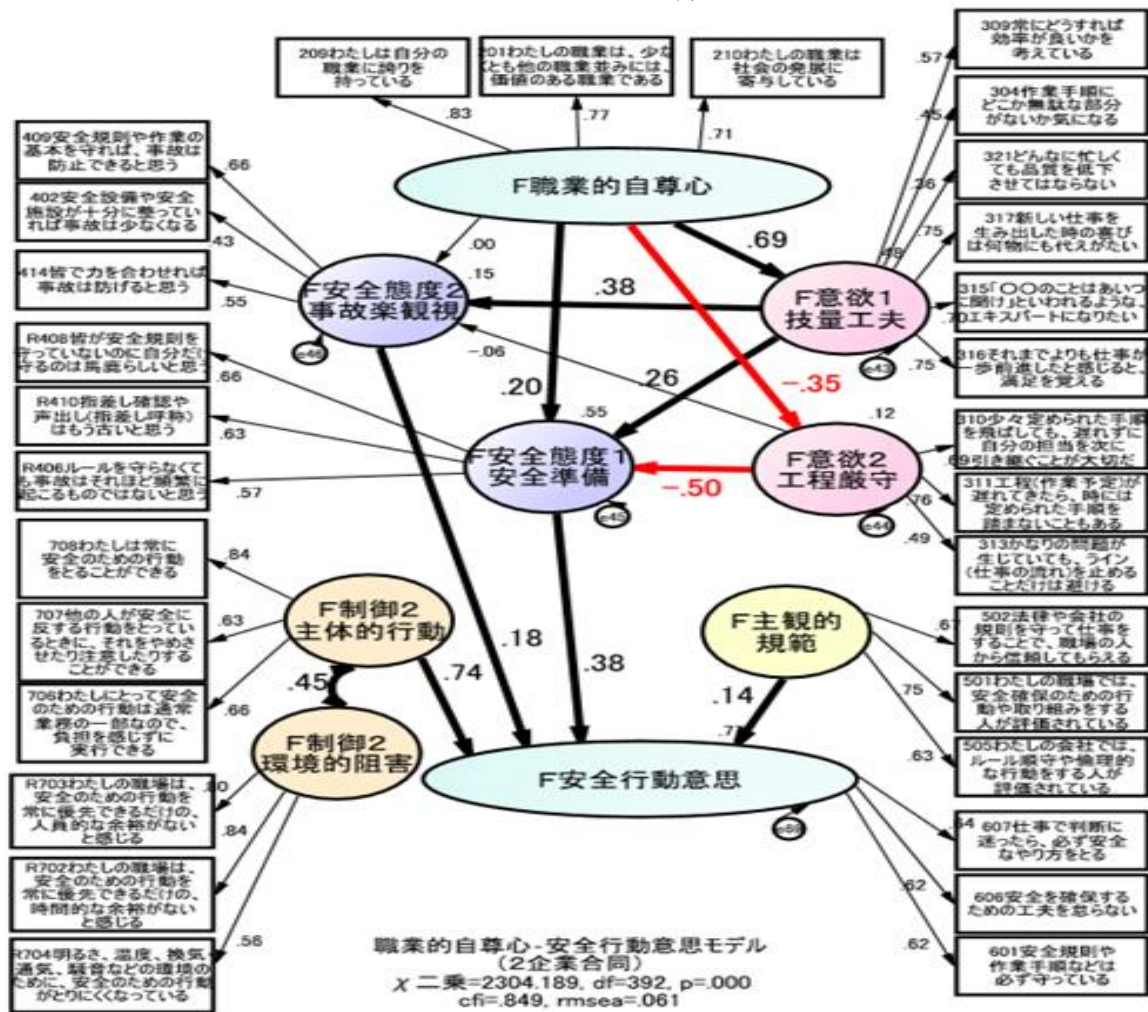


図3 職業的自尊心 - 安全行動意思モデルの分析結果 (標準化係数 5%水準で有意なパスのみを図に示す)